

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720188

研究課題名（和文）戦国文字と記録媒体に関する基礎的研究—戦国史像の再構築—

研究課題名（英文）Basic Research on the Characters and Recording Media of the Warring States Period : Reconstruction of the Historical Image of Warring States Period

研究代表者

下田 誠 (SHIMODA MAKOTO)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：40448949

研究成果の概要（和文）：本研究は戦国文字と記録媒体に関する基礎的研究を通じて戦国史像の再構築を目指すものである。本研究では記録媒体別に資料を整理研究し、それら資料のまとまり（資料群）から読み取ることのできる時代の特徴をとらえようとした。実際に研究を進めた記録媒体と文字は戦国時代三晋と燕の青銅器銘文、秦の簡牘・印章の文字である。本研究は期間中、戦国出土文字資料の「史料化」という方法を考案し、十個の基準を提示した。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to reconstruct the history of the Warring States Period through basic research on the characters and recording media of this period. In this study, documents are organized and researched by the recording media. An attempt is then made to capture the characteristics of the period that can be read from these document groups. The recording media and characters for which research actually progressed are the bronze ware inscriptions of the Sanjin and Yan states during the Warring States Period, as well as the characters found in bamboo slips and seals of the Qin Dynasty. This study devised a method of archiving the Warring States Period excavated character documents during this period and presented ten criterions.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：戦国文字・記録媒体・中国古代史・資料学・先秦史・秦漢史  
国際研究者交流（中国・台湾）・国際情報交換（中国・台湾）

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 戦国文字

研究開始当初、戦国文字に関しては国内外ともに楚系文字の研究に集中していた。陸続

と楚系竹簡が公開される現状、そうした傾向は当然であり、今なお変わらない。

本研究は研究代表者（以下、筆者と称す）の博士論文『中国古代国家の形成と青銅兵器』（汲古書院より2008年刊行）を引き継ぐ

ことから、三晋系統の文字に関心を示しつつ、戦国文字の多様性と共通性の議論の上に自身の研究を位置づけようとした。

## (2) 記録媒体

記録媒体とは戦国時代に文字を記録した対象であり、青銅器（容器・兵器）・貨幣・陶器・漆器・竹簡・木簡・帛書・印章などである。記録媒体をモノとして精緻に研究する伝統は日本の漢簡研究などに見られる。

本研究も記録媒体のモノとしての側面に注目しながら、かつ記録媒体別に資料整理と研究を進めることとした。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は戦国文字と記録媒体の基礎的研究・分析を通じて、戦国史像の再構成を行うことにある。

(2) こうした基礎研究を進める目的は、中国における首長制社会（あるいは初期王朝・初期国家）から専制国家への展開を具体的に把握することである。

中国の戦国時代は新石器時代以来の歴史的展開の結実としての側面と秦漢帝国へと接続する出発点として側面、その両面を備えた過渡期として、筆者は注目している。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究方法

本研究では前述の背景により、戦国時代の青銅器銘文を中心に研究する。

その研究方法は下記の通りである。

- ① 青銅器（容器・兵器）の器形の模写。
- ② 銘文の模写。
- ③ 器名・字数・時代・現蔵（流伝）・拓本所蔵の整理・入力。
- ④ 釈読の諸説を収集・整理し、入力する。
- ⑤ 字書類を引き、自らの釈文を作成する。

こうした作業過程において、さまざまな着想が得られる。着想を深め、検証するためにさまざまな研究を渉猟し、精読する。

### (2) 研究計画

本研究は自身のこれまでの研究を一步前に進めるため、次のような具体的な計画のもと実施した。なお秦の青銅兵器研究は別経費によって進めているため、それ以外の主要地域の青銅器と文字の研究をおこなった。

平成 20 年度 趙国兵器研究

平成 21 年度 中原地域青銅器の編年  
平成 22 年度 燕斉兵器研究  
平成 23 年度 呉越・楚系青銅兵器と鳥書

## 4. 研究成果

### (1) 出土文字資料と歴史像の再構築

筆者はこの4年間いかに出土文字資料を戦国史像の再構築に役立てるか、という課題に取り組んできた。その際、意を用いたのは考古学とも古文字学とも異なる歴史学のための出土文字資料の利用法を確立することであった。筆者はこの研究の過程で出土文字資料の「史料化」という方法に行き着いた。

### (2) 戦国文字と記録媒体に関する成果の概要

期間中、筆者は戦国三晋の青銅容器・兵器銘文に関する研究〔雑誌論文①・③・④・⑥・⑧〕のほか、秦代の竹簡に記された法律の訳注〔雑誌論文②・⑤〕や秦封泥の研究も進めてきた。

青銅容器は王族や世族の日常生活や祭祀に供する器であり、度量衡の基準を示すものもある。青銅兵器は戦争に使用されるものである。竹簡に書かれた秦の法律は行政上の各種規定や刑罰を記しており、封泥は行政文書や物品の発信者を示している。記録媒体にはそれぞれの特質があり、それに即して整理することで当時の政治・社会の特質に迫ることが可能になる。

筆者の研究方法は記録媒体に関していえば素朴なものであったが、記録媒体横断的な研究とは一線を画している。かりに特定の記録媒体や資料群を網羅的に整理した場合、どうしても不思議な資料がまじってくる。それは現実の多様性であり、その謎にこそ同時代の特質が現れているのである。記録媒体と資料群への着目は私たちの常識では知りえない世界に近づく方法であり、これこそ歴史像再構築の出発点である。

戦国文字については、〔雑誌論文③・⑧〕において文字の考古学ともいいうる方法に挑戦した。青銅器銘文の画像データを取り込み、主要文字ごとに網羅的に型式分類を試み、これまで知られていなかった字形の特色と国別対応関係が明らかになった。こうした筆者の分類は新出資料の出現に際し、国別や編年に力を発揮しており、そうした実践を〔雑誌論文①・④〕でおこなっている。

### (3) 戦国出土文字資料の「史料化」の方法

前述の通り、筆者は戦国出土文字資料との

対話を続ける中で「史料化」という方法に至った。一つ一つの遺物・文字は未だ歴史復元の素材となりえず、歴史家の「史料化」に係る作業を経て歴史を紐解く「史料」となっていく〔雑誌論文③〕。

筆者は「史料化」の過程を示すため、戦国時期青銅器銘文（とくに三晋紀年銅器銘文）を対象として下記のような基準を設けた。これは甲骨研究の成果をふまえて作成したもので、古典的な方法に属する。筆者は三晋紀年銅器銘文を対象にこの基準を考案したが、他の戦国出土文字資料にも応用は可能である。通常、中国の古文字学者は新しい資料が出現した場合、自然と下記のような作業過程を経て積文を作成していく。

1. 墓葬と同伴器
2. 型式
3. 辞銘格式
4. 紀年（王侯在位年）
5. 人名
6. 機構と官職
7. 地名（県名）と帰属
8. 特殊用語
9. 字形
10. 真贋

筆者がこの積文作成過程をあえて「史料化」と呼ぶのは、歴史学における史料提示の意味を大きく見るからである。歴史家の第一の仕事はバイアスの比較のとれた、理解可能な資料を世の人々に提供することだと考えている。理解可能というのは、その特定の史料の中で、或いは同時代の中でそれなり整合性をもって理解できる、という意味である。

かりに考古学であれば、上記の基準のうち1と2が最重要かもしれない。筆者は考古学の成果に大いに学ぶ者であるが、通常、考古学は伝世品を排除する。考古学は考古学的発掘を経て得られた資料を対象とする。これは科学的態度であり、尊重されるべき所であるが、実際、中国には大量の伝世品や来歴不明の資料がある。有銘の伝世品や新出の文字資料に対し古文字学と呼ばれる学問領域が文字を解読考証して積文を作る仕事を担ってきた。古文字学の歴史学に対する貢献は極めて大きい。しかし、ときに古文字学は個別の文字の考証に終始して、全体の様子が不明となる。

筆者は結果として古典的な方法に属するとはいえ、上記の作業過程がいまなお歴史像再構築に有効な方法であると強く認識された。これが筆者の戦国文字と記録媒体に関する研究の一つの到達点である。

#### （4）戦国史像の構築に関する成果

研究期間中には戦国史の理論的考察を進めた論考〔雑誌論文⑦〕と青銅器銘文資料と文献史料の総合による戦国韓の政権構造の特色を論ずる文章も発表した〔雑誌論文⑨〕。

戦国文字と記録媒体に関する研究は緒に

就いたばかりであり、今後とも発展させていく所存であるが、一つの区切りとして最終年度末に報告書『戦国文字と記録媒体に関する基礎的研究—戦国史像の再構築—』（冊子体）を作成した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計9件）

①下田誠「盧氏令戈考」『長江・三峡古文化学術研討会暨中国先秦史学会第九届年会論文集』重慶出版社、査読有、2011年、607頁～610頁

②佐々木研太・下田誠「龍崗秦簡訳注（後編）」『中国出土資料研究』第15号、査読有、2011年、42頁～104頁

③下田誠「中国戦国時期青銅器銘文の史料化に関する一試論—三晋紀年銅器銘文の字形分析を中心に—」『学習院大学文学部研究年報』（学習院大学文学会）第57輯、査読無、2011年、29頁～65頁

④下田誠「日本武器形青銅器と中国戦国時期三晋青銅武器との接点を訪ねて—兼ねて『物勒工名』形式銘文の一事例—」鶴間和幸・鐘江宏之編『東アジア海をめぐる交流の歴史的展開』東方書店、査読有、2010年、3頁～28頁

⑤佐々木研太・下田誠「龍崗秦簡訳注（前編）」『中国出土資料研究』第14号、査読有、2010年、150頁～218頁

⑥下田誠「戦国文字・戦国史研究の新展開—殷周金文集成（修訂増補本）の出版と上海博物館所蔵青銅兵器の調査をふまえて—」『人文』（学習院大学人文科学研究所）7、査読有、2009年、107頁～136頁

⑦下田誠「戦国期を中心とする中国古代国家形成論—その現状と課題—」『歴史評論』699、査読有、2008年、2頁～14頁

⑧下田誠「再論三晋“冶”字」『古文字研究』第27輯、査読有、2008年、334頁～340頁

⑨下田誠「戦国時期韓国的権力構造—以上層政権の結構を中心—」『周秦倫理文化与現代道德価値国際学術研討会論文集』陝西人民出版社、査読有、2008年、325頁～333頁

〔学会発表〕（計4件）

①下田誠「武靈王から恵文王へ—青銅兵器銘文からみた戦国趙の機構的改革の実践—」中国出土資料学会平成23年度大会（第3回例会）、2012年3月10日、東京大学文学部（東京都）

②下田誠「盧氏令戈考」長江・三峡古文化学術研究会暨中国先秦史学会第九届年会、2010年6月14日、大礼堂賓館（中国重慶市）

③下田誠「中国古代国家の形成と青銅兵器」中国社会科学院歴史研究所先秦史研究室主催・先秦史料研読班第八期、2009年12月18日、中国社会科学院歴史研究所（中国北京市）

④下田誠「再論三晋“冶”字」中国古文字研究会成立30周年国際学術研究会、2008年10月12日、吉林大学（中国長春市）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

下田 誠 (SHIMODA MAKOTO)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：40448949